

施設で一時間程度。傾聴は、何気ない会話のやりとりの中で、相手の気持ちを受け取る作業。会話が進むに従って、入居者の本音が吐露される。

「ここでも何かお手伝いしたいんですけど、やることがないんですけど、やることがないんです」。「ここ数カ月、本調子でなくつて。私のいのち、どうなつてるんだろう?なんて考えたりします。だけど、まだ使命が残っているのかな」。

傾聴によって、入居者の悩みが解決するわけではない。しかし、悩みを受け止めてくれる人がいるだけで、入居者は安心感を持つことができるのだろう。また、訪問先のご門徒の個室にはご本尊やお仏壇が安置されおり、「明尽苑」の田代さんによれば、「ご家族と『重誓偈』をお勤めした。帰り際、「次はいつ来るの?」と次回の訪問を心待ちにしておられた入居者の様子がとても印象的だった。副住職は、今回の傾聴ボランティアを通して、あらためて、

「来てもうよりも赴くことの大切さを実感したという。」

### 門信徒主催の仏教講演会

天真寺の門信徒の活発な活動は傾聴活動にとどまらない。

千葉県の松戸市・流山市・柏市・我孫子市には、東西本願寺の有志の十一ヶ寺の門信徒から成る浄土真宗東葛仏教会がある。この会は、年に二回、「公開仏教文化講演会」を行つていて。

天真寺からは太田忠勝さんがスタッフとして参加した。今回は、協賛寺院の浄真寺・前田義朗住

職の基調講演に続き、「オペラ恵信尼さん」が上演された。本公演は、「恵信尼消息」にもとづくもので、老齢となつた恵信尼さまの苦悩や慶び、親鸞聖人や子どもたちへの思いを、ソプラノ歌手柏原奈穂さんが歌つた。最後は、協賛寺院の僧侶が散華を行う中で幕を閉じた。

終了後、天真寺の門信徒から、「お子さんに会えなかつた晩年の恵信尼さまが切なかつた」「僧侶とのコラボレーションが印象

的だった」といった感想があがつた。門信徒と僧侶が力を合わせると、大きな感動を生むことができると感じた。

**悩みに寄り添いながら仏法を**

恵照住職はこれまで、ご法義

一筋に、門信徒を第一に考えて歩んできた。

一方、龍哉副住職は、布教伝道に加え、より広くご縁を作ることに努めている。

副住職は、これまで東京で五年間、仕事帰りのサラリーマンやOLの方がたへの傾聴活動を行つてきた。そこで得たことは、「人は聞いてもらえる場があれば嬉しい」ということだつた。「これからは、お寺で悩み相談の場を設け、一緒に悩みに寄り添いながら、仏法をお届けして、御恩報謝させていただきたい」。

寄り添う心がご縁をつなぐ」。



西原恵照住職と龍哉副住職



「恵信尼さん」鑑賞後に、天真寺の門信徒の皆さんで集合写真。



「恵信尼さん」会場風景。定員400名の開場がほぼ満席。開式にあたり、天真寺門徒・太田忠勝さんが舞台で調声をつとめ、「礼讃文」を唱和した。



ホームでのお勤め風景(特別養護老人ホーム明尽苑にて)。

## 西の空 心に響くことば

### 「いちょう」

まぶしいような  
青空の中を

子供達の歓声と

太陽の放射をあびながら

軽く 実に軽く

散つてゆく

裏をみせ

表をみせ  
サラリと 実にサラリと

散つてゆく

#### 【作者プロフィール】

鈴木章子(すずき・あやこ 1941-1988)

北海道常呂郡留辺蘋町に生れる。42歳の時に癌が発見され手術するも、その後転移し、46歳で逝去。癌の告知後、時ときに織られたクートが癌告知のあとでとして出版され、多くの人に語り継がれていた。

(「いちょう」: 癌告知のあとで より)

(Jaula/PIXTA)